

論文審査の要旨および担当者

愛知学院大学

報告番号	甲 ① 第 号	論文提出者名	長塚 明
論文審査 委員氏名	主査 服部 正巳 副査 福田 理 後藤 滋巳		
論文題名	高齢全部床義歯装着者の咀嚼能力を評価する 調査票の有用性について		

インターネットの利用による公表用

(論文審査の要旨)

No.1.....

(2000字以内のこと)

愛知学院大学

摂取可能な食品を用いた咀嚼能力評価については、様々な客観的咀嚼能力評価法との比較、または顎堤条件あるいは咬合力など他の要因との関連を追求した歯科補綴学からの報告や、口腔衛生学や栄養学など様々な分野から数多く報告されている。しかし、評価が質問紙法を用いた主観的評価であることから、評価法の信頼性および妥当性について検討されるべきだが、そうした報告は少ない。

そこで本研究では、摂取可能な食品を用いた咀嚼能力評価法の客観性に加えて、質問紙法としての信頼性、妥当性、および社会的または身体的状況が異なる多くの人に応用が可能な汎用性、調査票の尺度の一元性に着目し検証している。

対象および方法を以下に示す。

対象者の一方は愛知学院大学歯学部附属病院に通院している患者群 (AGU)、他方は福祉施設の入所者群 (OYA) で、生活環境が大きく異なる高齢全部床義歯者 152 名を被検者としている。これらの被検者に対し、30 品目の食品からなる咬める食品チェックリストの調査票を用いて咀嚼能力を調査し、また、被検者自身の咀嚼についての評価および装着している義歯への総合評価と Dental Prescale による最大咬合力と咬合接触面積も計測している。

この調査を基に分析、検討を行い以下の結果を得たとしている。

1. 分散分析の結果から、そのままかめると回答した食品数の平均値は、

両群ともほぼ同じであり、信頼係数（クロンバックの α 係数）は両施設群ともに高く（AGU：0.95, OYA：0.9, Total：0.93）、調査票の内的一貫性が示されたと述べている。

2. Fisherの直接確立検定の結果から、各食品のそのままにかめるという回答率は30食品の中3食品を除いてAGUとOYA間で差がみられなかった。調査票にある食品が、生活環境等の違いに関係なくすべての高齢全部床義歯装着者の咀嚼能力を評価できることを意味しその汎用性が示されたとしている。

3. そのままにかめると回答した食品数と咀嚼の評価（AGU： $\rho=0.51$, OYA： $\rho=0.41$, Total： $\rho=0.46$ ）ならびに義歯の評価（AGU： $\rho=0.47$, OYA： $\rho=0.4$, Total： $\rho=0.44$ ）との間に正の相関関係が見られた。どちらも評価が高いほど食品数が多く構成概念妥当性が示されたと述べている。

4. 最大咬合力および咬合接触面積と咀嚼の評価は、AGUでは、「かめる」、「普通」、「かめない」と回答した群の順に咬合力が小さくなる傾向がみられ、また咬合接触面積も「かめる」、「普通」、「かめない」の順で小さくなる傾向がみられ、弱いながらも関連性があることが推察された。しかし、OYAでは関連性がみられず違いはみられなかったと報告している。

5. 因子分析の結果、調査票の回答結果は固有値が大きい一つの因子で構成されていることがわかった。さらに、多くの食品で第一因子の因子負荷量が大きいことが確認された。このことにより尺度の一元性が示されたと述

べている。

これらの結果により、以下の所見を得たとしている。

摂取可能な食品を用いた咀嚼能力評価法は、社会的または身体的状況が異なる多くの人に応用が可能であり、「そのままにかめる」と回答した食品数が、全部床義歯による歯科補綴治療の目標値になり得る可能性を示唆している。また、現義歯に不満がなくても機能的に優れた新義歯を装着することで、口腔機能が改善されて QOL を向上させることが期待できるとしている。

これらは貴重な知見を提供しており、歯科補綴学および関連諸学科に寄与するところが大きい。よって、本論文は博士（歯学）の学位授与に値するものと判定した。